

二〇二〇年度 入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

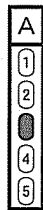
- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

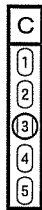
(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。



○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

自然科学といえども、単に「事実」や「データ」がありさえすればそれでよいというわけにはいかない。しかし、それでは、データと理論との間には何が介在するのであるのか。それを価値もしくは意味の問題に絞って考えていくことにする。

自然科学は、人文科学や社会科学と違って人間の価値判断から解放されているという特徴をもっている。自然科学では、扱われる対象としての事実群が観測者たるわれわれにレイゲン^(あ)に強制することがらだけを、われわれが受け取り、それを処理すればよいのであって、たとえば歴史を編む場合のように、事実の認識や選択に、人間の主観の操作が入り込む余地はない。このような自然科学のもつ「没価値性」こそが、今日自然科学の、全地球的な普及、つまりは歴史的な時間と空間を超越した全面的な普遍性の基盤となるものなのだ。

自然科学の特性を語る場合に、価値の問題が絡むと、つねにこの種の議論が現れる。これほど素朴な形はとらないとしても、科学と価値を巡る議論のおおむねの骨子は、科学の「客観性」を「没価値性」に重ね合わせることが多く、それを出発点として、さまざまなバリエーションが出てくることになる。

一つの例を引いてみよう。一九六八年六月のある日の『ニューヨーク・タイムズ』は、ガリレオ裁判事件に関して、現在カトリック教会の権威筋がその再検討を考慮し、ガリレオの復権を目ざして活動に入っていることを報じ、オーストリアのコーニック枢機卿^{ききゅう}がノーベル賞受賞者の晩餐会^{ばんさん}の席上でこの件について語った談話の一部を紹介している。

コーニック枢機卿は、ガリレオ事件が、科学と宗教の問題を真面目に取り扱おうとする人々にとって、^(じ)クジユウに満ちたものとなっていることを率直に認め、とりわけ教会が、精神・思想の自由と、偏見を乗り越えた正義とを主張しようとする第二バチカン公会議の精神にのっとるとき、ガリレオ事件は、あらゆる制限を撤廃して、自由に、徹底的に解明しなければならぬいし、そうすることが、信仰者の正しさを究極的に立証するための一つの機会ともなる、と主張する。

そして、科学と宗教との協力関係を樹立するという面に焦点を絞ったとき、今日の神学は、「本質的な神の啓示」による知識

と、「哲学的な思索」による知識と、「現実を無私の心で眺めたときに得られる素朴な知識」の三者を、ガリレオ時代よりもはるかに鋭く峻別し、これを混同しないという出発点から、問題を解明しようとしている、とコーニック枢機卿は指摘する。

察するところコーニック枢機卿は、第三番目の知識カテゴリー、すなわち「現実を無私の心で眺めたときに得られる素朴な知識」と、自然科学の知識とを等置して考えていると思われる。そうした考え方のなかには、「現実」はユニークであり、それを「無私の心」つまり「現実」の姿が、だれの眼にも一様に映じ、誰にもそれを「素直に」理解することができるはずである、とする強い確信がある。

A

更^{あらた}めて論ずるまでもなく、近代は、神学から哲学が分離し、哲学から自然科学が分離したうえで、それぞれが、お互いの守備範囲を確認し、相手の守備範囲を侵害しないという不可侵条約を締結した時代であったと言つてよからう。そして、ブルーノや、ガリレオや、その他「科学と宗教の闘争史」を飾る数々の事件は、そうした不可侵条約が結ばれる以前の、不幸な相互の権利の侵害によつて惹き起こされたものであり、そうした不幸な事件を克服するためにこそ、お互いに守備範囲を遵守することがとめられた、という歴史的事情が、一方に存在するのはたしかであろう。

そのとき、科学の守備範囲は、「現実」との素朴な接触によつて得られる「客観的な」事実の世界のみに限られる。一方、哲学的な構築は、そうした事実群から成立している自然科学的な世界のうゑに、主観的な作業によつて築き上げられるという知識のヒエラルキーが存在することになる。そして最後に神の啓示は、前二者のような「人間的な」種類の知識とは別の源泉から、別の方法によつて、人間存在のシン^うオウをうつつものとしてソ^えテイされるわけである。

啓示の問題については、ここで論ずるのを控えよう。だが、コーニック枢機卿の言うごとく、客観的世界と主観的世界とを、近代がこのように弁別したことによつて、科学と哲学の両者は、その守備範囲のなかにいる限り、お互いにわずらわされずに、独自に発展・展開することができると考えられたのであり、いわば、科学、哲学、神学は、中世における三者^①の一体的状況を脱却して、それぞれが、専門化、独立化の途^{みち}をたどることになったと言えよう。

このような図式のなかでとらえられる場合、自然科学の扱う世界、またそれによって構築される世界が、すべての偏見や先入観や価値観から **ア**、無色透明の、中立の……つまり一言で言えば **イ**「的な性格をもっていることは、ほとんど必然的になつてしまはずである。

たしかに、その三種の知識を区別して、それぞれの範囲のなかで、閉鎖的な自律性を保たせ、 **a**、科学的知識のカテゴリに「客観性」という特性を与えて他と区別することのもつある意味での、妥当性を、私も否定はしない。その妥当性とは、いわば「機能的な」観点からの、という但し書きの付いた妥当性と考えてよいだろう。

b、そうすることによって、科学的知識を、すべての価値の問題から切り離し得た、と考えるとすれば、それは、話を「機能的な」議論に限定している場合はともかく、「本質的」には大きな錯覚ではなかったであろうか。

自然科学が相手にしている「事実」なるものが、 **ウ**「現実」からの情報として人間ならだれでもが、正しい見方をすれば得ることのできるものである、という素朴な思い込みについては、すでにその誤りがある程度明らかにすることができた。

第一に、歴史的な時間と空間との制限・規定を受けない抽象的、普遍的な「人間一般」という概念は、少なくとも知識の担手の身分を論ずるに当つては、まったく無意味ではないか、という論点がある。かりに、自然が人間に見せる姿・ソウボウは、ユニークであるとしても、それを「見る」人間が、歴史的な時間と空間とを越えて普遍かつ不変であることは不可能である。

② プトレマイオスの地球中心説とコペルニクスの太陽中心説を構築するための「事実」群は、少なくともコペルニクスが自説を展開した段階では、まったく同じであつたといつてよい。いや、この言い方はやはり正確ではない。明らかに、まったく同じ「事実」群から、まったく異なつた理論体系が生まれるはずがない。ただ、ここで両者の出発点となる「事実」群が同じだ、と言ふのは「事実」が **エ** 的で、客観的なものだ、という前提を逆手にとつたうえで表現であることに気を付けて欲しい。つまり、客観的に「事実」は一つである、という解釈に立てば、プトレマイオスの地球中心説も、コペルニクスの太陽中心説も、ともに、まったく同じ「事実」群から出発している、とすることができるとだ。

コペルニクスは、プトレマイオスの手にしていた「事実」群以上に、太陽中心説を決定的に有利に導くことができるような、新しい「事実」を利用して、太陽中心説を提案したわけではなかった。言い方を換えてみれば、コペルニクス当時知られていた天文学上の「事実」群は、プトレマイオス説によっても、コペルニクス説によっても、まったく同じ程度に十全に、説明することができたのである。

たとえば、地球の公転を裏書きするための決定的な「事実」の一つと普通考えられている恒星の年周視差が、望遠鏡で観測されたのは一八三八年が最初である。わずらわしいが、多少数値にまで立ち入ってみれば、こうした恒星の最大年周視差（つまり、地球から最短距離にある太陽以外の恒星についての年周視差）は、約二五〇〇分の一ほどであり、一方人間の眼が最高の条件下に識別可能な最小の角度差は、約二五分の一度と言われている。一八三八年に、恒星の年周視差が、望遠鏡の助けを借りて発見できたのは、明らかに、地動説という前提が先にあつて、そこからの演えきによって、視差が見つかるはずである、という確信に導かれたからであつて、当然のことながら、年周視差が発見されたために、地動説（太陽中心説）が生れたのではない。先にふれた数値から判断すれば、恒星の年周視差は、観測された事実とさへ呼べないほど、言ってみれば「無理強い」に観測した事実なのであつた。

この一事をもつてしても、コペルニクスの轉換の原動力は、データそのものにはなかつたことが明らかである。要するにユニークであるはずの自然（「現実」）から人間が読み取つた情報が、実はプトレマイオスとコペルニクスとで異なつていた、というところに問題の核心があるのであり、情報は、歴史的な時間と空間とに制約された人間存在に依拠して変化する、と解釈してはじめて、こうした現象は説明できるであろう。その意味で、地球中心説を構築していた「事実」群と、太陽中心説を造り上げていた「事実」群とは、客観説に従えば同じであつたにもかかわらず、c、はつきりと違つていたと言わざるを得ない。簡潔に言えば、すべての「事実」は、人間によつて帰納力と演えき力との双方を備えたものとして把握されたときに、「事実」としての機能をもつことになるのであつて、その帰納力と演えき力による双方向への「伸び」は、歴史的な時間と空間との関数関係によつて流動するものと考えられる。

それは、人間一般と自然一般などというものの間に、客観的にユニークな情報のやりとりなどあり得ないということの、一つのたとえにほかならない。しかし、それを言い立てたところで、まだ価値の問題に直接つながるわけではない。自然科学の扱う「事実」なるものについての常識的な基盤に一太刀浴せることができたからと言って、d 自然科学の没価値性という神話も、一蓮托生いちれんたくしょうに破綻するかどうかは自明ではないからである。

(村上陽一郎『近代科学を超えて』より。ただし原文の一部を変更した。)

注 年周視差

地球が太陽の周りを公転運動しているため、一年を周期として恒星の方角が変化する現象、またはその変化の大きさのこと。

問一 傍線部(あ)～(お)にあてはまる漢字を含む文を一つずつ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 じげん立法として成立する
- 2 新薬のちけんを行う
- (あ) レイゲン
- 3 そうごんな式典を催す
- 4 自治体のざいげんを確保する
- 5 理想をぐげんかする

(い) クジユウ

- 1 げんじゅうに注意する
- 2 交渉はなんじゅうを極めた
- 3 気力がじゅうじつする
- 4 権力にくつじゅうする
- 5 じゅうなんに対応する

(う) シンオウ

- 1 じゅうおう無尽に活躍する
- 2 好奇心がおうせいだ
- 3 データのちゅうおう値を求める
- 4 因果おうほうの教えを説く
- 5 武術のおうぎを極める

(え) ソテイ

- 1 事故の応急そちをする
- 2 空襲のため集団そかいした
- 3 医師のしよけんを聞く
- 4 仕事の失敗で意気そそうする
- 5 そせい回避を規制する

1 むせつそうに行動する

2 激しい戦いで満身そういとなる

(お) ソウボウ 3 かそう現実の世界を楽しむ

4 為替そうばが変動する

5 かそう行列に参加する

問二 空欄

A

に入る最も適切な文を一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

1 この確信、信念が、自然科学の没価値性を神話化してきたのである。

2 この確信、信念は、今では時代遅れに感じられる。

3 この確信、信念は、知識のヒエラルキーについての無理解に基づいている。

4 この確信、信念は、まさしく近代に特有のものである。

5 この確信、信念が、自然科学によるおごりや権利侵害を招くのである。

問三 傍線部①「三者の一体的状況」が示す内容として最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

1 科学、哲学、神学が、協力関係を樹立するための努力をしていた状況

2 神学が、知識の一体性を維持するために科学や哲学に闘争を挑んでいた状況

3 神学が、科学や哲学を三位一体説に基づいて把握していた状況

4 科学、哲学、神学が、いずれも主観的世界にかかわるものとして理解されていた状況

5 科学、哲学、神学が、それぞれ自律性をもった知識として区別されていなかった状況

問四 空欄

ア

エ

に入る最も適切な語を一つずつ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|---------|---|--------|---|-------|
| ア | 1 | 形作られた | 2 | 出発した | 3 | 等距離にある | 4 | 自由な | 5 | 一歩進んだ |
| イ | 1 | 普遍 | 2 | 没価値 | 3 | 本質 | 4 | 事実 | 5 | 現実 |
| ウ | 1 | ユニークな | 2 | ありふれた | 3 | かけがえのない | 4 | 意味を備えた | 5 | 不変の |
| エ | 1 | 機能 | 2 | 本質 | 3 | 演えき | 4 | 哲学 | 5 | 中立 |

問五 空欄

a

d

に入る最も適切な語を一つずつ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|
| a | 1 | 翻つて | 2 | なかんずく | 3 | あまつさえ | 4 | 逆に言えば | 5 | いきおい |
| b | 1 | つまり | 2 | たとえば | 3 | もちろん | 4 | たしかに | 5 | だが |
| c | 1 | やはり | 2 | ますます | 3 | とりわけ | 4 | いかにも | 5 | さすがに |
| d | 1 | ましてや | 2 | つまりは | 3 | さらには | 4 | はたして | 5 | かくして |

問六 傍線部②「プロトレマイオスの」から始まる三つの段落で述べられている内容として最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 コペルニクスの時代の歴史を編もうとすれば、事実の認識に主観の操作が入らざるをえない。
- 2 コペルニクスの時代の科学者たちにとって、先入観をもたずに自然を理解することは難しかった。
- 3 事実を精密に観測する方法がない時代でも、コペルニクスのような人物がいれば自然科学の理論は発展する。
- 4 コペルニクスが太陽中心説を提唱したことをきっかけに、近代の自然科学は強引に事実を観測するものとなった。
- 5 太陽中心説を裏書きする事実とされているものは、実は、太陽中心説に導かれて発見された。

問七 本文に合致する内容として最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

1 神学から自然科学が分離した現在、神学が自然科学の守備範囲を侵害してきた不幸な歴史を徹底的に解明しなければならない。

2 時代や地域によって観測する人間が異なっても正しく自然を観測すれば誰でも同じ事実を得られる、と考えるのは誤りである。

3 自然科学の知識を他の知識から区別するとき、客観的な知識という基準によって区別してはならない。

4 自然科学の理論さえも没価値的とは言えない第一の理由は、その基礎となるデータが必ずしも客観的とは言えないからである。

5 これまでの自然科学の理論の誤りは、人間がもつ帰納力や演えき力に限界があるために生じた。

〔二〕 つぎの文章は、小説の一節である。米国ジュリアード音楽院で学ぶマサル・カルロス、かつて天才少女と呼ばれた栄伝亜夜、楽器店勤務のサラリーマン高島明石は、国際ピアノコンクールでコンテストアント(出場者)として一次予選を競っている。これを読み、後の問いに答えよ。

マサルが現れた瞬間、会場には拍手と共に不思議などよめきが始まった。

その瞬間、観客にも彼が「特別な」人間だと分かったのである。

彼は観客に向かって微笑みかけながらステージの中央に進んだ。

すごつ。出てきただけでステージが華やいだ。ほんとに明るくなったよ。

亜夜は驚嘆の目でステージ上の「王子様」を見た。

映画封切当日、舞台挨拶に現れた映画スターみたいだ。

一九〇センチ近いのではないかと思われるスラツとした長身を、品のいい光沢のあるブルーグレイのスーツが包んでいる。

白いシャツには、明るい紫とグリーンを合わせたおしゃれなタイ。ネクタイを締めているコンテストアントは意外に珍しい。

緩やかにカールした焦げ茶色の髪。彫りの深い、穏やかな印象を与える顔。

椅子を調節する青年を、観客が息を詰めて注視している。

亜夜は、ふと奇妙に懐かしい心地がした。

彼をずっと前から知っていたような気がしたのだ。

スターというのはね、以前から知っていたような気がするものなんだよ。

昔聞いた声が脳裡に蘇る。確か、この声は。

なんとこのかな、彼らは存在そのものがスタンダードだからね。世の中には現れた瞬間にもう古典となることが決まっているものがある。スターというのは、それなんだ。ずっとずっと前から、観客たちが既に知っていたもの、求めていたものを

形にしたのがスターなんだね。

ああ、これは綿貫先生わたぬきの声だ。亜夜は小さく頷うなずいた。

ピアノの手ほどきをしてくれたのはお母さんだけれど、音楽を愛することを教えてくれたのは綿貫先生だった。先生はどんな音楽も分け隔てせずに愛していた。先生のレッスンは大好きだった。先生の家のドアを開けると、いつもいろんな曲が流れていた。レッスンに行くのが楽しみで楽しみで、毎日でも押しかけたいくらいだった。

でも、先生は亜夜が十一歳の時に亡くなった。身体の不調を訴えて入院されてから、あつというまのことだった。

あのまま綿貫先生についていたら、お母さんがいなくなっても演奏活動を続けていたかもしれないな、という考えが頭をかすめた。あのあとについた先生は、技術といい譜面の理解といい、プロの演奏家になるための指導という点では完璧だったけれど、音楽を愛するという点については綿貫先生ほどには教えてくれなかった。

青年は椅子に腰掛け、つかのま宙を見た。

思慮深げな横顔に目が惹ひきつけられる。

観客の注目をいっしんに集めたことを確認したかのような瞬間、彼はサッと鍵盤を撫なでるようにしていきなり弾き始めた。なんてチャーミングなんだろう。

その瞬間、彼の音とその音を生み出す彼自身に、観客が恋したのが分かった。

一同魅了される、とはこういうことか、と亜夜は思った。

客席全体がひとつの耳になり、目になり、発情している。そして、ステージの上の彼はそれに負けたり気圧けおされたりすることなく自然に観客の秋波あきなみを受け止め、それに応えているのだ。

それにしても、弾く人でどうも音が違うものか。

知ってはいても、そのことを目の当たりにすると改めて不思議でたまらない。

基本中の基本とはいえ、杓子定規しゃくしじょうけいに弾くとBGMのように聞き流せてしまう平均律クラヴィーアが、こんなにもいきいきと

スリリングに聴けるなんて。

一音一音が深く、豊かで剥き出しではなく、ピロッドで包んだかのような。なのにちゃんと、シンプルでちょっとシニカルな
パロックの響きがする。

うーん、装飾音符が綺麗。亜夜は舌を巻いた。

決して流れず、かといって流れも止めず、きっちりとしつつも曲の一部になってる。

それに、なんて楽しそうに弾くんだろう。どこにも余計な力が全く入っていない。鍵盤を撫でて^ないるかのようなのに音の粒は明快だし、隅々までピアノが鳴っている。独特のポーズやスタイルでピアノを弾く人もいるけど、見ているほうにも力が入ってしまつて気を取られることもある。それに比べ、この人の弾いている姿は安心して身を委ねられるおおらかさに満ち、なおかつその音楽には周到に細心の注意が払われているのだ。

凄い、全然余力がある。音楽がおっきい。

そう思った時、また綿貫先生の声が聞こえてきた。

身体の中に大きな音楽を持つて、その音楽が強くて明るくて、狭いところに決して押し込められない——
そう、まさにそんな感じ。いつだったか先生はそんなことを言ったっけ。

なるほど、ナサニエルが自慢するわけだわ。

嗟哉三枝子も審査員席でマサルに見入っていた。

審査員席は二階席ぜんぶを使い、十三人の審査委員がゆったり間を置いて二段に座っている。三枝子とナサニエルは上の段の両端に座っていた。今、この驚嘆すべきコンテスタントの演奏を聴きながら、皆が師匠であるナサニエルを意識していることは間違いない。

スケールが大きい、という単純な表現がこうも素直に出てくるのは久しぶりだ。器用なピアニスト、堅実なピアニストは大

勢いるし、皆よく勉強しているけれど、かえって破天荒な「大きさ」や余白を感じさせるピアニストはなかなか出にくくなってきている。

この子には、本来矛盾し相反するはずのものをすんなり自分のものにしてしまう、とんでもない度量の広さがある。パーティーで対面した時の印象を思い出す。

野性的なのに優美、都会的なのにナチュラル。

ピアノの音はみずみずしくも老獪^{ろうかい}。未知数の部分がまだまだ多いというのに、既に風格すら感じさせる。

高島明石は、しばらく座席から立ち上がれなかった。

嵐のような大歓声の中で、客席が一体となった熱狂が天井に向かって限りなく上昇していくのに逆らって、彼だけが重力の底にめりこんで沈んでいくように感じられた。

頭の中に浮かされたような喝采と熱狂だけが残り、同時にそれこそマンガの効果音のように「がーん」という重い鐘の音の残響がいつまでもしつこく続いて、身体の中から消えていかない。

マサル・カルロス・レヴィ・アナトールの後に登場した女性コンテスタントは、「気の毒」の一言だった。どんなに懸命に弾いても、観客は上の空で舞台上のコンテスタントを目にしつともまだマサルの余韻に浸り、まだマサルの姿を見ていたのだ。驚くべきことに、その次のコンテスタントでもまだその余韻は残っていて、ようやく観客が目の前の演奏に集中できるようになったのは三人目になってからのことだった。

今日はマサル^③・カルロス以前、マサル・カルロス以後だな。

明石はそんなことを力なく考えていた。

マサルが登場するまでは、むろん、レベルの高さはひしひしと感じていたけれども、それぞれの演奏を冷静に楽しんだり分析したりすることができた。前日の自分の演奏に手ごたえを感じていたし、実際、客席で聴いてくれた友人や同僚の感想

も、お世辞抜きで感心してくれているのが伝わってきて、悪くない感触を得ていた。

これなら負けない。これなら俺だつて。

考えないようにしていたけれど、同じコンクールのコンテスタントで、一緒にふるい落とされる相手なのだから、心の声を完全に無視するのは無理というものである。

しかし、マサルが出てきた瞬間、そんなちまちました声は吹っ飛んだ。

明石はなるべく他のコンテスタントの情報は仕入れないようにしていた。というより、そこまでの時間がなかったというのが正直なところである。

それでも、音大時代の友人や同僚の情報網から、なんとなくめばしいコンテスタントの噂はチラチラと聞いていた。

ナサニエル・シルヴァーバーグの愛弟子で、超弩級ちゆうぶきゅうのコンテスタントが来る、という噂は耳に留めていた。耳を疑ったのは、その同僚がニューヨークで彼の演奏を聴いたことがある、というから「どうだった」と尋ねたら、なんと彼が聴いたのは、トロンボーントロンボーンの演奏だったというのである。考えてみれば、その同僚はクラシックも聴くが、学生時代はジャズ研でベースを弾いていたという男で、彼がたまたま耳にしたのはニューヨークの老舗ジャズクラブでだったというのだから当然だ。

これがすげえんだよ、カーティス・フラーフラーばりにプロウしまくるゴリゴリの先鋭的なソロで、まだ十五、六歳だというのにプロ顔負け。

あとから経歴を聞いて、なんとトロンボーンは趣味で、本業はジュリアードのピアノ科の学生だというので仰天したという。なんでも、ギターやドラムスもかなりの腕前だという話である。

ああ、なんでもできちゃう、苦勞知らずの天才タイプね、と明石は内心高たかをくくつていた。才能が有り余っていて、ピアノ以外のものも一通りやってみましたが、みたいな。

脳裡のうりには、早熟な神童の、ややエキセントリックなイメージが出来上がっていた。きっと大事に育てられた、世事には

A

少年なんだろうな。

音楽界には、古くから神童というカテゴリーがある。確かに彼らは幼くして常人の見えないものを見て、いきなり音楽というものの秘密にアクセスできるのだろう。

だが、彼らには常人のしているものが見えない。遥か遠くに仰ぎ見る音楽に対する神格化された憧れ、燦然と輝く頂をめぐりしゼロメートルの裾野から音楽を志す喜び、さまざまな苦しみや挫折を乗り越えて一歩ずつ音楽に近付いていく喜びを知らない。

そういう意味では、天才に対する凡人の屈折した優越感というのも存在するのだ。

だから、明石は彼らに脅威を覚えたり、嫉妬心を覚えることはなかった。

だが、舞台上に登場したマサル・カルロスは、彼の貧弱な「天才」についてのイメージを粉碎してしまった。

なんとという成熟、なんとという音楽的スケールの大きさ、構築する音楽のなんとというレベルの高さ、それらを十九歳という時点で持ちえていることが、奇跡的なのだ。それをなしているからこそ、本当に、本当の、天才なんだ。

明石はその音楽の素晴らしさに恍惚としつつも打ちのめされていた。真摯で思慮深い音には、これだけ恵まれた条件を備えているにもかかわらず、求道者のようなストイックさすら感じられた。

そうなのだ、彼は音楽というものの全体像をつかみたいがため、音楽というものの深淵を突き詰めたがために、トロンボーンやギターなど、他のアプローチを試してみているに過ぎないのだ。片手間なんかじゃない。あくまでも、それは音楽のたぬなのだ。

ピアノでそこに辿り着くために、手がかりを求めて他の楽器からそれを理解する可能性を探しているだけなのだ。どうしてこんな人間が、この世には存在しているのだろう。

絶望で頭がいっぱいになる。文字通り、目の前が B になった。

どうしてこんなふうに生まれなかったのだろう。どうしてこんな人間と、同じ楽器で同じ時代に、同じコンクールで勝負しようとしているのだろう。

どうして、どうして。

そんなことを考えているうちに、「マサル・カルロス以後」のコンテスタントの演奏はするすると早送りのように目の前を流れて去っていった。彼の登場は今日の一次予選の真ん中くらいだったはずなのに、後半はあつというまに終わってしまい、気がつくとも今日の一次予選が終わって、観客が三々五々引き揚げていくところだった。

どうして。

明石は心の中でそう繰り返しながら、ようやくのろろと席を立ち上がった。二次に向けての練習をしなければならぬと分かっているのに、どうにも億劫くわくに感じられるのが、自分の受けたショックの大きさを証明していて、彼は嘆息しつつ、人気のなくなっていく観客席の傾斜した通路を、重力にあらがい老人のように歩いていった。

(恩田陸『蜜蜂と遠雷』より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 本文中の空欄

A

B

に入る言葉として最も適切なものを、各群から一つずつ選び、解答欄の番号をマ

クセよ。

- | | | | | | |
|---|-------|--------|---------|-------|-------|
| A | 1 甘い | 2 疎い | 3 そつがない | 4 ひ弱な | 5 もろい |
| B | 1 真つ青 | 2 真つさら | 3 真つ白 | 4 真つ暗 | 5 真つ黒 |

問二 傍線部(あ)～(う)の本文中における意味として最も適切なものを、各群から一つずつ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- | | | | | | | |
|-----|--------|----------|---------|--------|--------|--------|
| (あ) | 秋波 | 1 静寂 | 2 陶醉 | 3 驚嘆 | 4 興奮 | 5 熱視線 |
| (い) | 周到に | 1 果敢に | 2 巧妙に | 3 入念に | 4 理的に | 5 沈着に |
| (う) | 高をくくって | 1 見当をつけて | 2 見くびって | 3 見定めて | 4 見抜いて | 5 評価して |

問三 傍線部①「奇妙に懐かしい心地がした」のはなぜか。適切なものを二つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 マサルに、今初めて会ったような気がしなかったから。
- 2 マサルは、すでに名ピアノニストの一人として活躍しているような印象を受けたから。
- 3 スターとは、観客には既知の存在だと思っていたから。
- 4 スターについて、綿貫先生に言われたことが思い出されたから。
- 5 音楽を愛することを教えてくれた亡き綿貫先生を思い出したから。

問四 傍線部②「彼だけが重力の底にめりこんで沈んでいくように感じられた」とあるが、明石の心の状態として適切でないものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 コンクールに挑戦したことに對する徒勞感
- 2 想定外のことに茫然自失の状態
- 3 コンテスタントとして惨めな気持ち
- 4 あまりの演奏に気をのまれた状態
- 5 マサルの演奏に對する敗北感

問五 傍線部③「マサル・カルロス以前、マサル・カルロス以後」とはどういうことか。明石が思ったこととして、最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 マサルの演奏で、それ以前の演奏の印象が消えてしまった。
- 2 マサルの演奏後、観客の関心はマサルにしか向かなくなった。
- 3 マサルの後に演奏するコンテスタントたちは、明らかに不利になった。
- 4 マサルの演奏で、彼が天才であることを認めざるをえなくなった。
- 5 マサルの演奏が、コンクールの基準になった。

問六 傍線部④「彼らに脅威を覚えたり、嫉妬心を覚えることはなかった」のはなぜか。適切なものをすべて選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 神童とは所詮ただの青二才という固定観念を持っていたから。
- 2 天才に対する自分の劣等感を打ち消していたから。
- 3 自分はピアノを弾くついでに、他の楽器に手を出してみようとは少しも思わなかったから。
- 4 音楽を作り上げる過程の苦労や喜びを自分は分かっているから。
- 5 前日の自分の演奏に自信が持っていたから。

問七 この文章の表現や内容に関するもので、適切でないものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 観客の反応の描写は、マサルのスター性を印象づける表現である。
- 2 亜夜、三枝子、明石それぞれの内面描写と回想で物語が進行している。
- 3 マサルの演奏の大きさを表わすため、対比的な語句が用いられている。
- 4 亜夜は、マサルの演奏をまったく批判していない。
- 5 三枝子は、マサルの人間性の大きさには触れていない。
- 6 明石が繰り返す「どうして」という疑問の答えを、本人は求めている。

〔三〕 本の序章として書かれたつぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

本書は、一つの中心的なメッセージをめぐって書かれている。集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する、というメッセージである。

「集団主義社会」に対しては様々な定義が可能であるが、ここでは、人々が集団の内部で協力しあっている程度が、集団間で協力しあっている程度よりもずっと強い社会として定義しておきたい。もちろんどの社会でも、人々が集団の内部で協力しあっている程度は、集団を越えて別の集団の人々と協力しあっている程度よりも強いだろう。しかしここでは、この「内集団ひいき」の程度がとくに強い社会のことを集団主義社会と呼ぶことにする。

この意味での集団主義社会の典型は近代以前の伝統的な村落共同体である。現代でも、家族はこの意味での集団主義的な集団として考えることができる。このような集団主義的社会では、集団の内部では相互協力が簡単に成立しており、内部の仲間とだけつきあっている限りは、人に利用されたり搾取されたりしてひどい目にあうことを警戒する必要がない。

このような集団主義社会の①一つの例として、自動車もバスも電車もなかった、そして舗装道路もなかったころの山奥の村を考えてみよう。そこでは、現在の我々がほとんど無意識に行っている「警戒行動」——例えば家から外出するときに鍵をかける——をとる必要はほとんどない。それどころか、錠そのものがない家ほとんどである。このことは、鍵をかけるという警戒行動をとらなくても大丈夫だと、人々が安心していたことを意味している。

また、集団主義社会の内部で互いに警戒する必要がないという事例は、なにも昔の伝統的な共同体にまで思いをはせなくとも、現代の社会でも容易に目にすることができる。例えば、日本と欧米でのビジネスカンコウの比較に際して、日本では取り引き相手との間にまず「信頼関係」を作り上げることが大事で、そうなるまでには時間がかかるが、一度そういった関係が確立すれば、いちいち面倒な契約書を取り交わさなくとも電話一本で取り引きが成立する、といった逸話がよく使われる。日本社会でうまくビジネスをすすめるために重要なのは「信頼関係」を作ることだ、というわけである。この例は、いったん「信頼

係」が成立すれば、その内部では強固な協力関係が存在するため、契約書で身を守らなくても安心して取り引きができるということ、すなわち、日本でのビジネス関係は集団主義的な関係、その関係内部で安心していられる関係だということを示している。

これが、「集団主義社会が安心を生み出す」ということの大まかな意味である。この点に関しては、誰も異論のない当たり前の話だろう。しかし、筆者が一冊の本を書こうと決心したのは、なにもこのように当たり前の話をするためではない。そうではなく、メッセージの後半の部分が重要だと考えたからである。より正確にいえば、メッセージの後半の部分——「集団主義社会は信頼を破壊する」という部分——が、これからの日本社会をどのように創っていくかを考える際に、重要な意味をもつと考えたからである。

この部分は、前半の部分と違い、当たり前前の話ではない。筆者はこれまで、この点に関連する論文を内外の専門誌や学会誌、あるいは論文集に何度も発表してきた。しかし、これらの学術論文では、具体的な実験や調査の結果の報告を越えて、このメッセージのもつ意味について十分に述べることができず、物足りない思いをもち続けてきた。そこで、これらの論文の内容を紹介しながら一冊の本にまとめる中で、このメッセージと、それをめぐる研究全体がもつ意義について改めて考えてみようと思ったのが、本書を執筆することになったきっかけである。

③ このメッセージの意味を十分に理解するためには、結局は本書全体が必要である。しかし、ここでは最初にとりあえず、極端に単純化されたかたちでこのメッセージのエッセンスを伝えることにしておきたい。そのために、もう一度、電車もバスも自動車も舗装道路も電話もラジオもテレビもなかった時代の、手紙さえ届かない山奥の伝統的な共同体を思い浮かべてみていただきたい。そこに住む人々は、一生のほとんどをその小さな共同体の中で過ごしている。そしてその共同体の中では、人々はまわりの人間からひどい目にあわされるのではないか、騙されるのではないか、搾取されるのではないか、物をとられるのではないか、などと警戒している必要はほとんどない。そういった意味では、人々は共同体の中で安心して暮らすことができず。メッセージの後半が問題としているのは、このような共同体に住む人々の間に信頼が育成されているかどうかについてで

ある。

直感的には、このような共同体こそが信頼の育成にもっとも有効な環境であると思われる。しかし、上述のメッセージはこの直感的な理解に挑戦し、このような共同体は信頼を育成するのに有利な環境ではなく、逆に、信頼の育成を阻害する環境だとしてゐる。なぜだろう。

このような共同体に代表される集団主義社会では、自集団の仲間との関係では安心していられるが「余所者」^{よそ}に対して心を許さない傾向にあることは、直感的に理解できるだろう。このことは、仲間うちで安心していられることと、仲間うちを越えた他者一般ないし人間性一般に対する信頼をもつこととの違いを意味している。この違いが本書の議論の出発点であり、上述のメッセージの後半は、仲間うちで安心していられる関係(例えば山奥の共同体)にマイボツ^(い)していると、人間一般に対する信頼が育ちにくくなることを主張するものである。

筆者は、一見当たり前の、そしてしばしば忘れられているこの点の理解が、今後の日本社会のあり方を考える上で重要な意味をもつと考えている。というのは、今後の日本社会はこれまでのような集団主義的な、仲間うちでかたまつて協力しあつていくやり方ではうまく機能しなくなると考えられるからである。つまり、これからの日本社会では、これまでのように関係を外部に対して閉ざすことで関係内部での協力態勢を確立していくやり方が、社会・経済的な効率の達成に対する足枷^{かか}となつていくと考えられる。

この問題は、現在「規制緩和」の掛け声とともに、とくに経済の分野で認識されつつある問題でもある。これまでの日本社会では、既得権をもった企業や団体と政府官僚および政治家の間をはじめ、社会の様々な部分で閉ざされた関係をつくることで、関係内部で(既得権をもった人々の間で)協力態勢が確立していた。いわゆる業界と政府との癒着^{ゆわ}関係は、このような閉鎖的關係の典型例である。この癒着関係のおかげで、業界は外部からの競争から隔離され、安定した利益を確保することができる。しかし、そのつけはいつかは回ってくるだろう。現在「規制緩和」が真剣に議論されているのも、そのつけが競争力の低下として回ってきたことに気づくときには取り返しがつかなくなっているのではないかという心配が、その根底にあるからと考える

ことができる。

集団主義が信頼を破壊するという点の理解が重要なのは、閉鎖的な集団主義社会からより開かれた社会への転換に際して、一般的信頼がきわめて重要な役割を果たすと考えられるからである。これまでの信頼についての研究や一般常識では、信頼は人々の間の結束を強める働きをするという、信頼による関係強化の側面に目が向けられてきた。これに対して本書が強調しているのは、信頼にはそれと同時に、人々を固定した関係から解き放ち、新しい相手との間の自発的な関係の形成に向かわせるという、関係拡張の側面もあるのだという点である。

これまでの日本社会は、集団のギョウシユウ性⁽²⁾を高め、外部に対して閉ざされた関係の内部で安心していられる相互協力態勢を確立することを通して、社会や経済の効率的な運営を達成してきた。しかし現在では、関係を外部に対して閉ざすことの効用よりも、外部に対して開くことの効用が大きくなりつつある。

その典型は、企業間の取り引き関係に見ることができる。これまでのいわゆる「日本の経営」のもとでは、特定の相手との間に安定した取り引き関係を確立することが重視されてきた。いったん安定した関係が形成されれば、その相手との取り引きでは、例えば急な注文にも無理がきくとか、電話一本で話が通じるといった、様々なフレキシビリティが可能となる。また、いわゆる終身雇用制も、雇用者と被雇用者との間にこのような安定した関係が存在している状態として考えることができる。しかし、特定の相手との間の安定した関係を通してのみ取り引きを行うことで得られるこの「取り引きコスト」の節約は、そのことによって生み出される「機会コスト」との相対的な比較に応じて、メリットにもなればデメリットにもなる。ここで機会コストを、別の相手と取り引きすれば得られたはずの利益と、現在の利益との差として定義する。特定の相手とのみ取り引きをしていれば、当然この意味での機会コストを支払い続けることになる。別の相手に乗り換えても現在よりも大きな利益が期待できない場合、つまり同じ相手との取り引き関係を継続することに伴う機会コストがあまり大きくない場合には、安定した関係で得られる取り引きコストの削減は、全体としての企業の利益を向上させる有利な経営戦略だが、A、そのような戦略は不利な経営戦略となる。

④ 現在の日本社会では、経済やビジネスの分野だけではなく、社会の様々な側面で機会コストが急速に増大しつつある。例えば夫婦関係についても、経済的な取り引き関係と同じように、同じ相手との間に安定した夫婦関係を続けていくに伴う機会コストが増大し続けている。もちろん安定した夫婦関係を続けることで得られる「取り引きコストの節約」は現在でも大きな意味をもっているが、それに伴う機会コスト——もつといい相手と再婚できる可能性や一人で暮らした場合に得られる自由の喪失、等々——が急速に増大しつつある。そうすると、これからの社会で成功するためには機会コストをうまく引き下げること、つまり自分にとっての有利な機会を逃さないようにすることが重要な意味をもってくるだろう。このことは、社会全体をマクロに見れば、機会と人材のマッチング（適材の適所に対する配置）が適切になされるかどうかによって、社会全体の効率が決まってくることを意味している。

このような、個人のレベルで見れば機会の有効な利用、マクロなレベルで見れば機会と人材との間の適切なマッチングがうまくいくためには、安心していられる安定した関係の形成と、部外者に対する不信・差別を中心とする集団主義的な行動形態から脱却する必要がある。そしてさらに、機会と人材との適切なマッチングを可能とする「開かれた社会」をうまく運営するためには、人々が集団の枠を越えた他者一般に対する信頼をもつようになる必要がある。この意味で、今後の日本社会が、これまでの閉鎖性ないし集団主義型の安心社会から、開かれた機会重視型の社会への転換に成功するかどうかの鍵を握っているのは、人々の間に特定の集団や関係の枠を越えた一般的信頼が醸成されるかどうかである。このような社会の変化に直面して、どうしたら集団の枠にとどまらない広い一般的信頼を人々の間に醸成することができるかを考えることは、現在の社会科学あるいは人間科学に与えられた重要な課題の一つである。本書は、この課題に答えることを最終的な目的として筆者が行ってきた一連の研究の結果と、それらの研究をもとにした現在の段階での答えを、なるべく読みやすいかたちでまとめたものである。

（山岸俊男『信頼の構造——ここから社会の進化ゲーム』より。ただし原文の一部を変更した。）

問一 傍線部(あ)～(う)にあてはまる漢字を含む文を一つずつ選び、解答欄の番号をマークせよ。

(あ) カンコウ

- 1 かんような心をもつ
- 2 初志かんてつする
- 3 かんこう旅行に行く
- 4 かんよう句を覚える
- 5 資金がかんりゆうする

(い) マイボツ

- 1 ていまいの面倒をみる
- 2 あいまいな態度をとる
- 3 金のまいぞう量を調べる
- 4 知らない町でまいごになる
- 5 まいきよにいとまがない

(う) ギョウシユウ

- 1 事態をしゅうそくする
- 2 物資のしゅうせき所
- 3 社長のきよしゅうが注目される
- 4 戦争がしゅうけつする
- 5 前例をとうしゅうする

問二 傍線部①「集団主義社会」の内容についての筆者の説明として最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 集団に属する人々が、集団の内部で相互に協力し、集団の維持存続に貢献することを重視する程度がとくに強い社会
- 2 集団に属する人々が、集団に属する人々の能力を、集団の外の人々の能力より高く評価する傾向がとくに強い社会
- 3 集団に属する人々が、集団の外の人々と協力しあう程度に比べ、集団内部の人々同士で協力しあう程度がとくに強い社会

- 4 集団に属する人々が、個人の利益よりも集団の利益を優先して行動することを期待する程度がとくに強い社会
- 5 集団に属する人々が、集団の内部で協力しあう一方、集団の外部の人々との間でひどい目にあうことがとくに多くみられる社会

問三 傍線部②「安心」に関するつぎの記述の中から本文の趣旨に最も沿うものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 伝統的な村落共同体の内部でみられたような互いに安心していられる関係は、現代の社会ではあまりみられなくなっている。
- 2 家族をはじめ集団内部で相互協力が簡単に成立している関係性の中で安心して生活することは、集団を越えた人間一般に対する信頼の形成基盤となっている。
- 3 安心には、人々の結束を強めるだけでなく、人々を固定した関係から解き放ち、新しい相手との自発的關係の形成に向かわせる側面がある。
- 4 安心とは、「内集団ひいき」の程度が強い社会の内部で互いに対して警戒する必要がない状態を表し、人間一般に対する信頼とは異なるものである。
- 5 これまでのいわゆる「日本的経営」のもとでは、人間一般について警戒する必要が少なく、どのような相手とも契約で身を守らなくても安心して取り引きができる関係があった。

問四 傍線部③「このメッセージ」が主張していることの内容として最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

1 閉鎖的な集団の内部で簡単に協力が得られることに甘んじていると、集団の外部との関係ではひどい目にあうことが多く、他者への信頼が阻害されやすい。

2 集団の枠を越えて信頼関係を築いていくことが、これからの日本社会をどのように創っていくかを考える際に、重要な意味をもつ。

3 内部で強固な協力態勢が維持されている共同体の中で、他者を警戒することなく生活することこそが、人間一般への信頼の育成に最も有効である。

4 集団を個人より大事にすることが集団の規範になっていると、自集団で他者から自己を尊重されない経験を重ねることとなり、他者への信頼が阻害される。

5 閉鎖的な自集団の安心していられる関係にひたって生活していると、集団の枠を越えた他者一般への信頼が育成されにくくなる。

問五 本文中の空欄 A. に入る言葉として最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

1 機会コストが取り引きコストを下回る状況になれば

2 取り引きコストが機会コストを上回る状況になれば

3 機会コストが大きく削減できる状況になれば

4 取り引きコストが大きな状況になれば

5 機会コストが大きな状況になれば

問六 傍線部④「現在の日本社会」についての筆者の考えとして最も適切なものを一つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 日本の企業が相互に協力し、海外の企業に負けない競争力をつけることの効用が大きくなりつつある。
- 2 夫婦関係において、再婚による「取り引きコストの節約」が大きな意味をもつようになりつつある。
- 3 機会と人材の適切なマッチングが可能となり、社会全体の効率が高まりつつある。
- 4 関係を外部に対して閉ざすことの効用よりも、外部に対して開くことの効用が大きくなりつつある。
- 5 新しい取り引き相手との間に「信頼関係」を作り、その内部で強固な協力関係を構築する必要が高まりつつある。

問七 本文の内容に合致するものを二つ選び、解答欄の番号をマークせよ。

- 1 本書は、これまでの信頼についての研究であり論じてこられなかった、信頼が人々間の結束を強める働きをするという関係拡張の側面を強調している。
- 2 筆者はこれまでに「集団主義社会が信頼を破壊する」ことに関連する論文を数多く執筆し、このメッセージのもつ意味について十分に論じてきたが、一冊の本にまとめて執筆するのは本書が初めてである。
- 3 本書は、集団の枠を越えた他者一般への信頼を人々の間に醸成するにはどうしたらよいかという問いに関する研究成果をまとめたものである。
- 4 本書は、市民社会の伝統が民主主義の効率的な運営には不可欠であり、家族や集団を越えた一般的信頼が市民社会の伝統の中心にあるというメッセージをめぐって書かれている。
- 5 筆者が本書に記したメッセージは、集団主義社会が信頼の育成にもっとも有効な環境であるという理解に挑戦するものである。



